

岐阜大学工学部生命工学科
生命情報工学講座

森田 洋子准教授

せたり、進行を遅らせたりすることはできますが、病気そのものを治す治療薬や予防薬は

パーキンソン病は65歳以上の約1%が罹患するといわれ、多くの症例が非遺伝性であり

物質など複数の要因が関係していると考えられています。この病気では中脳のドーパミンという物質を多く含む神経が選択的に変性・脱落しますが、神経細

・脱落を抑制すること
ができれば、パーキン
ソン病の発病を遅ら
せ、ひいては発症を防
ぐことができるかも知
れません。

大学はいま
究室から

研

ありません。これらの病気は高齢者に多く、発病機構の解明および適正な治療薬・予防薬の開発は、高齢化社会をむかえた我が国にとり重要な課題でもあります。

パークソン病やアルツハイマー病などの神経変性疾患は、現在のところ症状を緩和さ



パークinson病治療へ努力

神経変性の原因は不明ですが、加齢、酸化ストレス、環境中の化学

胞が正常者の約20%に減少するまで症状は現れないと考えられます。即ち発病した時点ですでにドーパミン神経細胞は20%程度しか残っていないのです。従つて早い段階でド

物質など複数の神経傷害因子から神経細胞を保護することのできる化合物を創製し、パーキンソン病の治療薬および予防薬の開発を目指に鋭意研究を進めています。